

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第一8:1～6 「知識と愛」

[1-2]「次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を立てます。人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです」

コリントは商業と貿易の国際的な港町であり、そこには洋の東西のあらゆる宗教が根を下ろしており、人々は偶像の神々に供え物として動物の肉をささげていた。コリントではこの供え物の肉が取り下げられると祭司のものとなり、それがさらに氏子仲間にも分配され、また市場に卸されて売られていた。ここでクリスチャンの間で、そのような偶像にささげた肉を食べても良いかどうかという問題が起こって来た。ある人々は、そのような肉を食べることは偶像を認め、そのさまざまな影響を受けることとなると考えて食べないと言い、また逆に知識を誇るある人々は、偶像の神などというものは実際には存在しない。それゆえにそれを食べることは何の問題もないと言って食べた。ここでパウロは知識のある方の人々に対してその知識主義の危険性を「知識は人を高ぶらせ」と指摘し、「愛は人の徳を立てます」とそのあるべき姿を示す。知識は人を傲慢にさせることがある。無知な人々を冷たく見下し、切り捨て、同情しようとしなさい。しかし、愛は自分のことだけでなく人のことを考え、思いやり、自慢しない。高慢にならない。→ I コリント13:1～7

クリスチャンは様々な聖書知識を蓄えることは大切であるが、それだけであってはならず、互いに愛し合い、その愛に裏打ちされた知識によって行動し、人の徳を高めるようにしなければならない。→ I ヨハネ4:9～10 「真の知識の初めは、神を知ることであり、それが私たちのうちに謙遜をもたらし、私たちを内にへりくだる者とするのである。さらに真の知識は、私たちをおごり高ぶらせるどころか、かえってまったくむなしき者にするのである」宗教改革者ジャン・カルバンの言葉。

[3]「しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです」

私たちが神を愛したから、神は私たちを知っておられるのではない。むしろ私たちが神を愛するということが神がすでに私たちを愛し、私たちを知っておられるということの現れであり、しるしなのである。→ I ヨハネ4:7～8、19

[4]「そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています」

愛と知識との関係を示したパウロはここで偶像についての理解を再確認している。コリントの知識あるクリスチャンたちは、それを理由に偶像にささげた肉を食べたのであろう。

[5]「なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、」 神々と呼ばれるものは名前の上では確かに存在し、人々はそれを様々な形で表現し、偶像としている。しかし、それらは名前だけで、

その実態は何もないのである。偶像礼拝とは人間の考え出したものや、この世界の何ものかを何らかの形で神に祭り上げてそれを礼拝しているにすぎない。

[6]「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです」

パウロはコリントの知識人クリスチャンの言うことに同意するが、それだけにとどまらず、唯一の神、そして主イエス・キリストについて正しい位置づけをしている。

「…唯一の神がおられる」これが私たちクリスチャンの信仰告白である。そして「すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在している」と告白し、万物の起源と目的である創造主なる神を指し示す。また、主イエス・キリストがここで父なる神と同格に置かれており、万物も私たちも「この主によって」存在すると創造における役割と罪の贖い主としての特別な立場を示している。

万物は主イエス・キリストを通して父なる神の支配のうちにある。それゆえ、肉やその他の食物はいかなる意味でもクリスチャンを汚すものではなく、それを食することを恐れたり、禁欲主義に陥る必要はない。ただ今日の個所で教えられたように、クリスチャンはこの知識を愛をもって用いていかなければならない。